

比 恵 80

— 比恵遺跡群第 141 次調査の報告 —

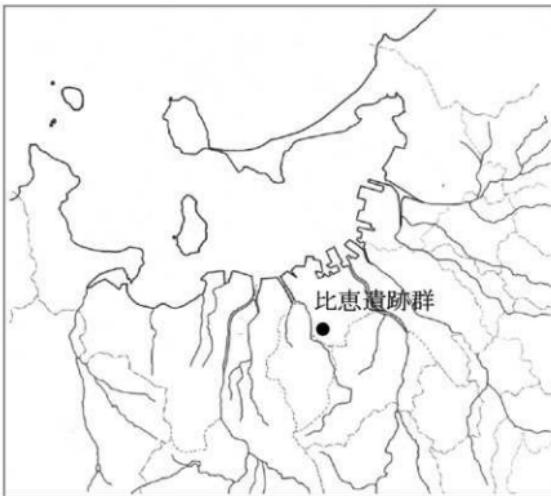
福岡市埋蔵文化財調査報告書 1348 集

2 0 1 8

福岡市教育委員会

比 恵 80

— 比恵遺跡群第 141 次調査の報告 —



調査略号 HIE-141

調査番号 1541

2018

福岡市教育委員会

序

福岡市は玄界灘を介して大陸・朝鮮半島と一衣帶水の関係にあり、古代より双方の交流が絶え間なくおこなわれてきました。そのため、市内には数多くの歴史的な遺産が残されています。しかし、近年の著しい都市化により貴重な文化財が失われているのは事実であり、これらの文化財を後世に伝えることは、本市の重要な責務です。

本書は、共同住宅建築に伴う比恵遺跡群第141次発掘調査について報告するものです。調査の結果、弥生時代から古代にかけての遺構や遺物が多数見つかり、特に古代に関しては硯や古代瓦といった貴重な遺物が出土しています。これらは比恵遺跡群における弥生時代から古代にかけての集落跡の広がりを知る上での手がかりになるとともに、地域の歴史の解明のためにも重要な資料となるものです。今後、本書が文化財保護に対する理解と認識を深める一助になるとともに、学術研究の資料としてもご活用いただければ幸いに存じます。

最後になりましたが、株式会社サンビーム様をはじめとする関係者の方々には発掘調査から本書の作成に至るまでご理解とご協力を賜りました。心から感謝申し上げます。

平成30年3月26日

福岡市教育委員会

教育長 星子 明夫

例 言

1. 本書は株式会社サンビームが実施した博多区博多駅南6丁目23-5、22-1番地内における共同住宅建設にともなう事前調査として、福岡市教育委員会が平成27・28年度に実施した比恵遺跡群第141次調査の調査報告書である。
2. 本書で用いる方位はすべて磁北である。
3. 検出した遺構については、調査時の検出順に通し番号を付した。本書ではこの番号に遺構の性格を示す用語を付して記述する。遺構の呼称は溝をSD、井戸をSE、土坑をSK、ピットをSP、不明遺構をSXと略号化している。
4. 本書で使用した遺構実測図は松崎友理、中園将祥、波多江彩香（福岡大学）が作成した。
5. 本書で使用した遺物実測図は松崎、中園、大庭友子が作成した。
6. 製図は松崎による。
7. 本書使用の遺構写真は松崎、波多江が撮影したものである。
8. 本書の執筆・編集は松崎が行った。
9. 本書に関わる記録類・遺物は福岡市埋蔵文化財センターに収蔵・管理されるので活用されたい。

遺跡名	比恵遺跡群	調査次数	第141次	遺跡略号	HIE-141
調査番号	1541	分布地図図幅名	東光寺 37	遺跡番号	0127
申請地面積	1211.5m ²	調査対象面積	500m ²	調査面積	495m ²
調査地	福岡市博多区博多駅南六丁目23番5, 22番1	事前審査番号	27-2-400		
調査期間	平成28(2016)年2月22日～6月15日				

本文目次

I.はじめに	1
1. 調査に至る経緯	1
2. 調査組織	1
II.調査区の立地と環境	2
III.調査の記録	6
1. 調査の概要	6
2. 遺構と遺物	8
(1) 井戸	8
(2) 溝	14
(3) 土坑	19
(4) 不明遺構	28
(5) 包含層出土	31
(6) 駄脚円面鏡	32
IV.まとめ	33

挿図目次

Fig. 1 比恵遺跡群と周辺遺跡分布図(1/25,000)	3
Fig. 2 比恵遺跡群調査区位置図(1/1,000)	4
Fig. 3 第141次調査区位置図(1/500)	5
Fig. 4 調査区南西壁土層図(1/60)	6
Fig. 5 第141次調査区遺構配置図(1/150)	7
Fig. 6 SE195上層土器出土状況(南西から)	8
Fig. 7 SE195下層土器出土状況(東から)	8
Fig. 8 SE195実測図(1/40)および出土遺物実測図①(1/3)	9
Fig. 9 SE195出土遺物実測図②(1/3)	10
Fig. 10 SE076実測図(1/40)および出土遺物実測図(1/3)	11
Fig. 11 SE076(北西から)	11
Fig. 12 SE100実測図(1/40)	12
Fig. 13 SE100(東から)	12
Fig. 14 SE100出土遺物実測図①(1/3)	13
Fig. 15 SE100出土遺物実測図②(1/2・1/1)	14
Fig. 16 SE217(北西から)	14
Fig. 17 SE217実測図(1/40)および出土遺物実測図(1/3・1/2)	15
Fig. 18 SD013・032・107・111・207土層図(1/40)および出土遺物実測図(1/3・1/2)	17

Fig.19 SD015・074・035・165実測図(1/40)および出土遺物実測図(1/3).....	18
Fig.20 SD035(南から).....	19
Fig.21 SK019実測図(1/40)および出土遺物実測図(1/3).....	19
Fig.22 SK110実測図(1/40)および出土遺物実測図(1/3).....	20
Fig.23 SK101・139・140実測図(1/40)および出土遺物実測図(1/3).....	21
Fig.24 各土坑実測図(1/40).....	23
Fig.25 各土坑出土遺物実測図①(1/3・1/1).....	24
Fig.26 各土坑出土遺物実測図②(1/3).....	25
Fig.27 SK222実測図(1/40)および出土遺物実測図(1/3).....	26
Fig.28 SK222(南から).....	26
Fig.29 SK224実測図(1/40)および出土遺物実測図(1/3・1/2).....	27
Fig.30 SK224(南西から).....	27
Fig.31 SX115実測図(1/40).....	28
Fig.32 SX043(西から).....	28
Fig.33 SX043櫛出土状況(北東から).....	28
Fig.34 SX043実測図(1/60).....	29
Fig.35 SX043出土遺物実測図(1/3・1/2・1/6).....	30
Fig.36 包含層出土遺物実測図(1/2).....	31
Fig.37 獣脚円面硯実測図(1/2).....	32
Fig.38 第141次調査区と周辺調査地(1/500).....	34

図版目次

- PL. 1 1 I区全景写真(南東から)
 2 II区全景写真(南東から)
 PL. 2 出土遺物

I. はじめに

1. 調査に至る経緯

今回の調査は、福岡市博多区博多駅南6丁目23-5、22-1番において、株式会社サンビームより共同住宅建設計画の策定にあたって、平成27年7月22日に埋蔵文化財の有無の照会が埋蔵文化財審査課になされたことにより始まる。申請面積は1211.5m²、受付番号は27-2-400である。

申請地は比恵遺跡群の南端に位置しており、埋蔵文化財審査課は照会を受けて平成27年8月18日に確認調査を行った。その結果、八女粘土の面で遺構が検出された。この成果をもとに協議を行い、工事によってやむを得ず破壊される500m²を対象地として発掘調査を行い、記録保存を図ることとなった。発掘調査は同社と福岡市との間で委託契約を締結し、平成28年2月22日に着手、平成28年6月15日に終了した。資料整理および報告書作成については平成29年度に行うこととなった。

2. 調査組織

調査委託 株式会社サンビーム

調査主体 福岡市教育委員会

(発掘調査: 平成27・28年度 整理報告: 平成29年度)

調査総括 文化財部埋蔵文化財調査課(現: 埋蔵文化財課) 課長 常松幹雄

同課調査第1係長 吉武 学

庶務 埋蔵文化財審査課(現: 埋蔵文化財課) 管理係長 大塚紀宣(27・28年度)

管理係 川村啓子(27年度)

入江よう子(28年度)

文化財保護課 管理調整係 松原加奈枝(29年度)

事前審査 埋蔵文化財審査課(現: 埋蔵文化財課) 事前審査係長 佐藤一郎(27・28年度)

本田浩二郎(29年度)

主任文化財主事 池田祐司

文化財主事 板倉有大(27年度)

大森真衣子(28年度)

中尾祐太(29年度)

発掘調査 埋蔵文化財調査第1係 文化財主事 松崎友理

埋蔵文化財調査員(嘱託) 中園将祥

発掘作業 宮崎正 廣瀬公則 吉田哲夫 柴田秀人 河原明子

本田憲作 久保和美 山本加奈子 渡邊彩香(福岡大学)

渡辺清嗣 吉岡田鶴子 本田ひろ子 山本千加子 進藤正長

整理作業 大石加代子 西村加奈

II. 調査区の立地と環境

比恵遺跡群は福岡平野のほぼ中央に位置し、東側を御笠川、西側を那珂川に挟まれた標高5～11mの中位段丘上に立地している。比恵遺跡群の南側に位置する那珂遺跡群とは東側から入る浅い谷によって区分される。比恵・那珂遺跡群が展開する丘陵は南側の春日丘陵に連なっており、那珂遺跡群の南側には五十川遺跡や井尻遺跡、さらに南には須玖岡本遺跡を中心とする遺跡群が広がっている。比恵遺跡群はこの丘陵の最北端に立地しており、比恵遺跡群の北側は台地の先端とともに沖積地となる。この沖積地は約1km先の博多遺跡群が立地する砂丘の後背湿地にあたる。比恵遺跡群の立地する丘陵は花崗岩風化礫層を基盤とし、その上部に粗砂・細砂・腐植土層、最上部に阿蘇山の火砕流による八女粘土・鳥栖ロームが形成されている。比恵遺跡群の範囲は南北約1km、東西約0.8kmで、現在の標高は5～7mを測る。

比恵遺跡群では、縄文時代晩期から中世にかけて各時期の遺構や遺物が多量に出土している。これまでの調査ではナイフ形石器が出土しており、遺物では旧石器時代まで遡ることができる。縄文時代前期の突帯文土器が出土しているが、この時期の遺構は確認されておらず、縄文時代の遺物や遺構は少ない。縄文時代晩期末から弥生時代前期にかけて遺構や遺物が急増する。その多くが台地の北側と西側の辺縁部に分布しているが、特に北台地では堅穴住居跡や貯蔵穴、木器貯蔵穴などが多数検出されている。このうち木器貯蔵穴からは木製の農具や工具、容器の他に剣形木製品や儀仗などが出土した。弥生時代中期になると、遺構・遺物の分布は遺跡範囲のほぼ全域まで拡大する。台地の中央では細型銅劍を副葬した甕棺墓や埴丘墓と考えられる甕棺墓群が検出されている。弥生時代中期後半になると大型の円形堅穴住居跡が出現し、弥生時代後期には台地中央部を中心とした集落が形成されたと考えられる。青銅器の鋳型や取瓶、ガラス滓が検出されていることから、比恵遺跡群でこの時期に青銅器やガラスの鋳造が行われていたと推定される。弥生時代後期の溝の中には集落を囲む環溝と考えられるものや方形区画のものが認められる。また、これらの溝とは異なる並列した2条の溝が見つかっている。この溝は丘陵の尾根に沿って南北方向に直線的に延び、那珂遺跡群まで続いており、道路状遺構の可能性が指摘されている。溝から出土した土器の年代から溝の掘削の上限は弥生時代後期後葉と推定され、古墳時代初頭を通じて溝としての機能を果たしていたと考えられている。

弥生時代に続き古墳時代においても集落は営まれ続けている。古墳時代前期初頭には丘陵の南側で方形周溝墓が確認されているが、比恵遺跡群の範囲内において前方後円墳の存在は確認されていない。古墳時代中期の遺構は比較的少ないが、古墳時代後期に入ると再び増加する傾向にある。古墳時代後期には大型の掘立柱建物群が認められる。大型の倉庫群と推定されるこれらの建物群には柵列や溝がある。官衙的な遺構と推定され、6世紀後半から7世紀代の遺構群と考えられる。推定される遺構の性格や時期から日本書紀宣化元年(536)に見える「那津官家」との関連が論じられている。

比恵遺跡群では古代になると遺構は散在するようになる。比恵遺跡群の南側に隣接する那珂遺跡群では7～8世紀にかけての遺構や遺物が多く検出され、古代の遺構は那珂遺跡群で展開するようになる。那珂遺跡群では大型掘立柱建物跡や溝、井戸、土坑などが検出されている。これらの遺構の中には7世紀初頭まで遡る可能性が指摘されているものも存在する。溝や井戸、土坑では瓦が出土しており、百濟系単弁八葉軒丸瓦や牛頭窓跡神ノ前窓系軒丸瓦・平瓦・丸瓦が見つかっている。那珂遺跡群では大型掘立柱建物跡や瓦などの出土遺物から古代における官衙的な施設や郡衙、寺院の存在が示唆されている。



- | | | | | |
|------------|-------------|------------|-----------|------------|
| 1. 比恵遺跡群 | 2. 那珂遺跡群 | 3. 山王遺跡 | 4. 雀居遺跡 | 5. 那珂君休遺跡 |
| 6. 板付遺跡 | 7. 高畠遺跡 | 8. 五十川遺跡 | 9. 諸岡A遺跡 | 10. 諸岡B遺跡 |
| 11. 下月限C遺跡 | 12. 立花寺B遺跡 | 13. 井相田D遺跡 | 14. 仲島遺跡 | 15. 井相田C遺跡 |
| 16. 井尻B遺跡 | 17. 三筑遺跡 | 18. 麦野A遺跡 | 19. 麦野B遺跡 | 20. 麦野C遺跡 |
| 21. 南八幡遺跡 | 22. 須玖岡本遺跡群 | | | |

Fig. 1 比恵遺跡群と周辺遺跡分布図 (1 / 25,000)



Fig.2 比惠遺跡群調査区位置図 (1 / 1,000)



Fig.3 第141次調査区位置図 (1 / 500)

III. 調査の記録

1. 調査の概要

本調査区は比恵遺跡群の南端に位置しており、那珂遺跡群との境の谷の落ち際にあたる。調査地点の現況は宅地解体後の平坦な土地であり、標高は約6.7～6.8mを測る。周辺では、北側で87次調査、北西側で45次調査、62次調査、99次調査、道路を挟んで東側では128次調査が行われている。45次調査、62次調査、99次調査では弥生時代終末期から古墳時代初頭にかけての道路の側溝と推定される並列の2条溝が検出されている。この2条の溝は比恵遺跡群から那珂遺跡群にかけて延びていることが確認されているが、本調査地はその推定ライン上に入っている。

周辺の調査区では鳥栖ローム層で遺構が検出されていることが多いが、本調査区では近現代に大きく削平を受けて鳥栖ロームの基盤層が失われており、遺構は八女粘土の基盤層で検出された。遺構検出面の標高は5.6～5.9mを測り、南側に向かって低くなる。遺構面までの基本層序は上から表土、褐灰色土、黄褐色土、灰黃褐色土となるが、調査区南東側などでは一部その下に黒褐色の包含層が認められる(Fig.4)。排土を場内で処理する必要があったため、まず調査地の西側をI区として最初に調査を行い、I区の調査終了後に反転して東側の調査を行うこととした。

発掘調査は平成28年2月22日に着手した。22～24日に重機による表土剥ぎを行い、地表面から約1.2m下がったところで八女粘土の面に達した。I区の遺構検出面の標高は約5.6mを測る。その後、世界測地系によるトラバース杭の設定や壁面清掃などを実施し、2月24日から遺構検出を開始した。検出遺構の掘り下げや写真撮影、1/20縮尺を主体とする図化、遺物の取り上げ、周辺測量などの作業を進め、遺構の掘削作業がほぼ終了した4月15日に全景写真を撮影した。その後4月25・26・28日に重機によるI区の埋め戻しとII区の表土剥ぎを行った。II区の遺構検出面の標高は約5.9mを測る。II区の南側では黒褐色土の包含層が検出され、人力で掘削を始めた。5月11日から遺構検出を開始した。I区に比べてII区では遺構の密度が薄く、北西側は大きく攪乱を受けていた。I区と同様の作業手順で調査を行い、6月2日に全景写真を撮影した。その後、残った図化作業や個別遺構の写真撮影、出土土器の洗浄作業などを行い、14・15日に重機によって埋め戻し、調査を終了した。

調査対象面積は申請面積1211.5m²のうち、500m²であるが、調査区周辺の安全対策上、実際の調査面積は495m²であった。なお、調査時の遺構番号については001から3桁の通し番号を遺構の種別に関わらず付している。それらの番号には欠番はあるが、重複しているものはない。次項からの報告に関しても、調査時の遺構番号を用い、例言に記した遺構略号と組み合わせて記述することとする。

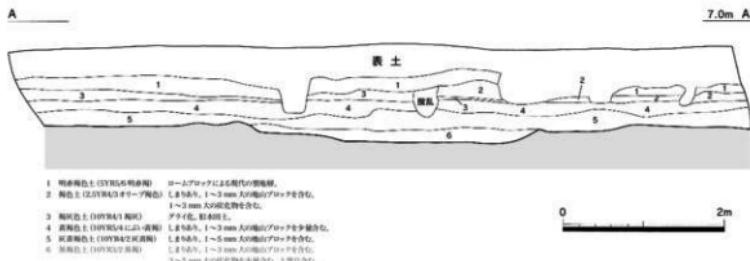


Fig.4 調査区南西壁土層図 (1 / 60)



Fig.5 第141次調査区遺構配置図 (1 / 150)

I・II区で合わせて井戸4基、溝5条を検出し、その他土坑やビットなど多数の遺構を確認した。井戸4基のうちII区中央北側に位置する井戸では、古墳時代中期の須恵器や土師器が良好な状態で出土している。それ以外の井戸はいずれも7世紀代の井戸と推定され、内2基は最底面に小石を敷いていた。溝に関しては、5条の内調査区のほぼ中央を通る1条について調査区の東側にあたる第128次調査で検出された溝に続くものと推定される。また、I区は弥生時代終末期から古墳時代初頭にかけての道路側溝と推定される並列の2条溝の推定ライン上に入っているが、そのライン上で不連続な溝状遺構を検出した。なお、I区の南端では深さ1.3m以上の段落ちが検出され、粗砂層において杭や樋とみられる木製品が出土した。

遺物は以上に挙げた遺構を中心に、弥生土器・土師器・須恵器・瓦・土製品・石製品・玉類など合計32箱が出土した。周辺の調査地と同様に弥生時代～古墳時代にかけての遺物が多く出土しているが、本調査地では7世紀代の須恵器や瓦など、古代の遺物も多く検出されている。特筆すべき遺物としては獸脚円面鏡の脚部片2点が挙げられる。2点は胎土や大きさが異なるため、別個体と考えられるが、いずれも脚部の前面下半には押圧施文による紋様が施されている。

2. 遺構と遺物

(1) 井戸

I区で2基、II区で2基、計4基の井戸を検出した。出土した遺物の年代から、1基が古墳時代中期、3基が古代に推定される。以下では時期別に述べる。

SE195(Fig.6~9)

II区の中央北側に位置する古墳時代中期の井戸である。標高約5.9mで検出し、直徑約2.2m、深さ約1.25mを測る。標高約5.3mで湧水した。埋土は主に上層が茶褐色粘質土、下層が灰黒褐色粘質土で、下層は地山ブロックを含む、非常に粘性の高い土質であった。底面は平坦で、壁体は上部に向かって広がる。西側にはテラス状の段が認められる。平面プランの中央付近で須恵器や土師器がまとめて出土しており、出土した土器は完形で残存しているもの多かった。Fig.6・7に出土状況を示したが、上層では土師器、下層では須恵器を多く検出した。SE195では半截時、上面中央において黒褐色土が半円形に検出された(Fig.6)。井戸枠の可能性があったが、北側を掘り進めると、円形に巡っておらず、平面プランを検出できなかった。下層においても黒褐色土の堆積を確認することができず、井戸枠については不明である。出土した土器は、底面より0.6m以上離れた状態で検出されており、井戸が廃絶し、ある程度埋まった段階で廃棄されたと考えられる。



Fig.6 SE195 上層土器出土状況（南西から）

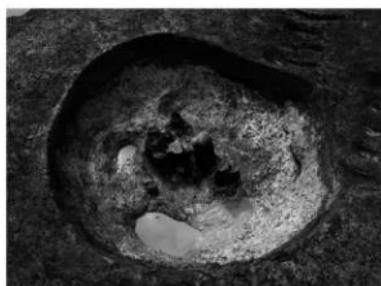


Fig.7 SE195 下層土器出土状況（東から）

[SE195出土遺物 (Fig.8-9, PL.2)]

須恵器および土師器が出土した。1～3は須恵器である。1は壺蓋で、天井部外面に回転ヘラケズリを施し、「×」状のヘラ記号を残す。2は壺身、3は高壺の脚部片である。3は三方に透かし孔があり、脚部外面に「×」状のヘラ記号を施す。4～10は土師器で、4・5は鉢である。4の胎土は精良で淡橙色を呈する。5は口縁部外面にヨコナデが認められる。6は小型の直口壺で胎土には白色砂粒を少量含む。器面は磨滅しているが、頸部外面にヨコナデ、胴部外面などにヘラナデが一部認められる。7～9は甕である。7は胎土に白色砂粒を多く含み、器面はにぶい橙色を呈する。器面は磨滅しているが、胴部外面にケズリ、口縁部内外面の一部にヨコナデが残る。8は短い口縁をもつ。調整は8・9とともに口縁部内外面にヨコナデ、胴部内面にケズリ、胴部外面にハケメがみられる。9の外面上半には煤が付着する。10は瓶の底部である。胴部外面にハケメ、内面にケズリが残る。底部は粘土の接合面で剥離している。

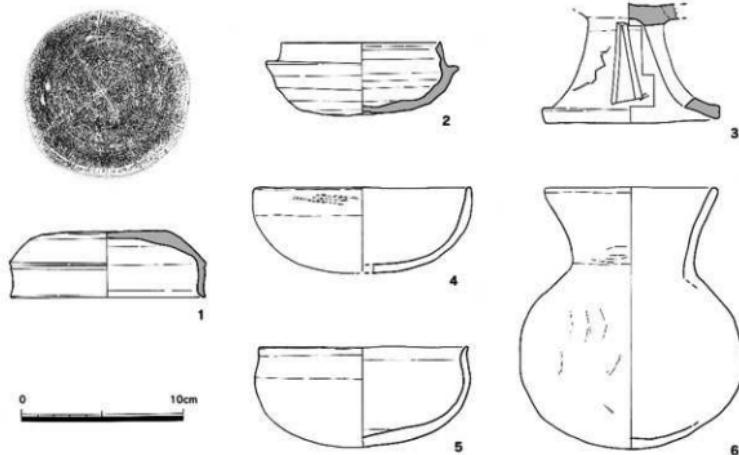
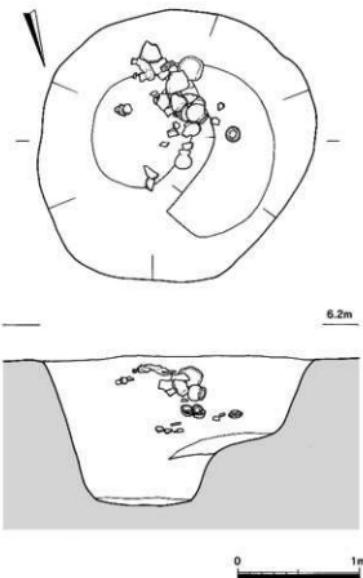


Fig.8 SE195 実測図 (1 / 40) および出土遺物実測図① (1 / 3)

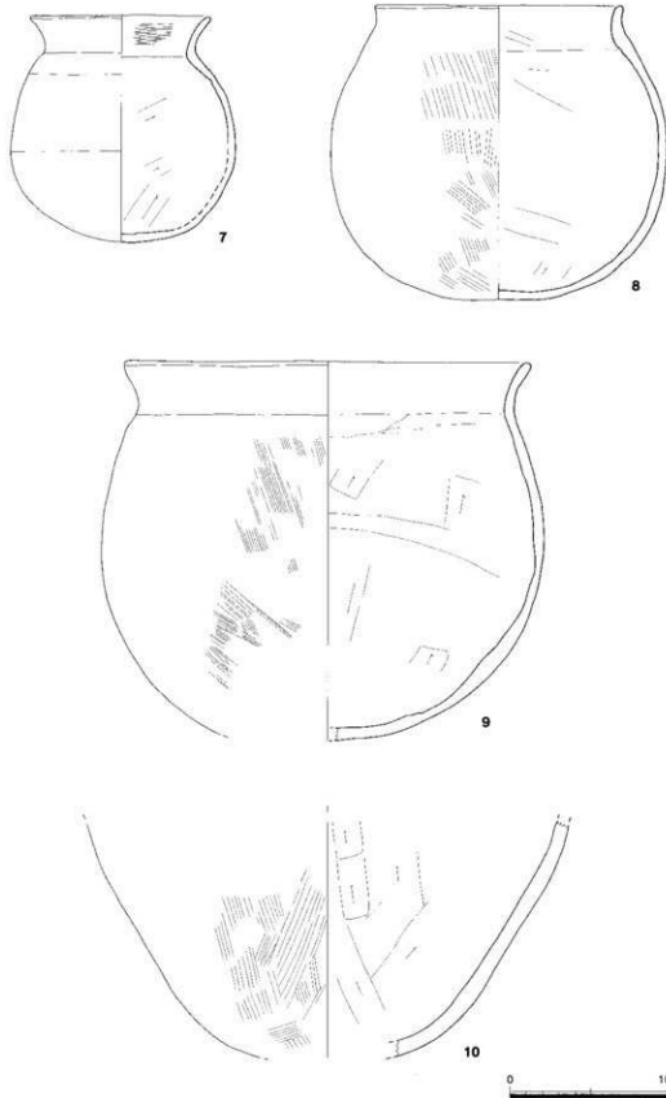


Fig.9 SE195 出土遺物実測図② (1/3)

SE076(Fig.10・11)

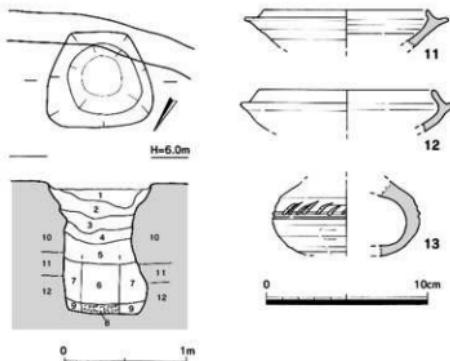
I区の中央よりやや西に位置する古代の井戸である。南側をSD111に切られる。標高約5.8mで検出し、平面プランは $0.80\text{m} \times 0.85\text{m}$ の台形状を呈する。深さは約1.1mを測り、標高約4.9mで湧水した。底面は平坦で、西側で若干オーバーハングするものの、壁面はほぼ垂直に立ち上がる。検出面から0.7m下までは黒褐色の粘質土が堆積し、その下で井筒を検出した。井筒の平面プランは直径0.3mの円形を呈する。井筒の周りの埋土は黒褐色粘質土、井筒内の埋土は褐灰色粘質土で灰白色の粘土を含み泥状であった。また、Fig.11で示すように井筒の最底面には5~10mm大の小石が約5~8cm堆積していた。最底面以外でこのような小石は検出されておらず、5cm以上にわたって堆積していることから、底面に意図的に敷かれたものと考えられる。透水性を高めるためと考えられ、出土した土器の年代から7世紀前半の井戸と推定される。

[SE076出土遺物(Fig.10)]

須恵器および土師器が出土した。土師器は細片が多く、図示し得ない。11~13は須恵器である。11・12は环身である。11・12ともに口縁部の立ち上がりが弱い。11は内外器面とともに回転ナデが施され、外面には灰かぶりがみられる。12は底部を欠損しているため不明確であるが、底部付近でヘラ記号の痕跡が認められる。13は口縁部を欠損したハソウである。内面と胴部外面に回転ナデ、外面胴部から底部にかけてヘラケズリがみられる。

SE100(Fig.12~15)

I区の東側に位置する古代の井戸である。北西側をSD111に切られる。標高約5.7mで検出し、平面プランは南北最大長2.15m×東西最大長2.05mで不定形を呈する。深さは約1.3mを測り、標高約4.6mで湧水した。底面は平坦で直径約0.4mの円形を呈し、本来は井筒が据えられていたと推定される。壁体は上部に向かって広がりながら立ち上がり、南側と西側にはテラス状の段が認められる。埋土



- 1 黒褐色土(10YR2/3黒褐色) 粘性なし。褐灰色のブロックを少量含む。
- 2 黒褐色土(10YR3/2黒褐色) 中や粘性あり。
- 3 黑褐色土(10YR3/1黒褐色) 粘性あり。
- 4 黑褐色土(10YR3/1黒褐色) 細かな砂粒を含む。土器片あり。
- 5 黑褐色土(10YR4/1黒褐色) 粘性強く、黄褐色のブロックを含む。
- 6 褐灰色土(10YR4/1褐褐色) 泥状であり、灰白色の土を含む。
- 7 黑褐色土(10YR2/2黒褐色) 粘性強い。
- 8 灰褐色土(2.5YR5/2灰褐色) 砂質。5~10mm大の小石を多く含む。
- 9 灰褐色土(2.5YR5/2灰褐色) 砂質。8mmのような小石を含まない。
- 10 黄褐色土(10YR7/4にじや黄褐色) 八女粘土(地山)。
- 11 周灰褐色土(5YR7/2明褐色) 八女粘土(地山)。
- 12 周灰褐色土(10YR4/2褐褐色) 破砂層(地山)。

Fig.10 SE076 実測図(1/40) および出土遺物実測図(1/3)



Fig.11 SE076 (北西から)

の主体は上層で地山ブロックを含む茶褐色粘質土で、下層は粘性の強い黒褐色の粘質土である。最底面では5～10mmの大いな小石が約5cm以上堆積していた。SE076と同様に、最底面以外でこのような小石は検出されておらず、約5cm以上堆積していることから、意図的に敷かれたものと考えられる。出土した土器の年代から7世紀前半の井戸と推定される。

[SE100出土遺物(Fig.14-15,PL.2)]

須恵器および土師器、土製品、石製品、玉類が出土した。14・15は須恵器である。14は坪蓋、15は坏身である。14は天井部外面に回転ヘラケズリ、それ以外は回転ナデがみられる。16～22は土師器で、16～18、21・22は甕である。16・17はともに口縁部内外面に横ナデ、胸部外面にハケメ、内面にケズリがみられる。16の体部外面には細い沈線が認められる。18は口縁部を欠損した胸部片で、外面にハケメ、内面にケズリがみられる。21・22は器面全体が磨滅しているため調整は不明である。19は高壺の脚部である。外面は磨滅しているが、一部でハケメがみられ、内面ではシボリが認められる。20は瓶の把手である。23は器台で、内外面ともにユビナデがみられる。24は滑石製の紡錘車である。半分が欠損しているが、断面は台形を呈する。裏面には細い沈線が認められる。底面付近で出土した。25～27は土鍤である。25・26は欠損しているが、25は最大幅約1.9cm、26は最大幅2.0cmを測る。27は全長約9.0cm、最大径2.7cmである。28は碧玉製の管玉で、長さ2.6cm、径0.65～0.7cm、孔径は0.3～0.4cmを測る。小口を含め全体的に丁寧な研磨が施されている。29～38は白玉である。いずれも滑石製で下層から出土した。法量は様々で、直径5～6mm、厚さ1.5～5.5mmを測る。39・40はガラス製小玉で39は緑青色、40は薄青色を呈する。

SE217(Fig.16-17)

II区中央に位置する古代の井戸である。南東側はSD107に切られる。標高約5.8mで検出し、平面プランは南北最大長2.2m×東西最大

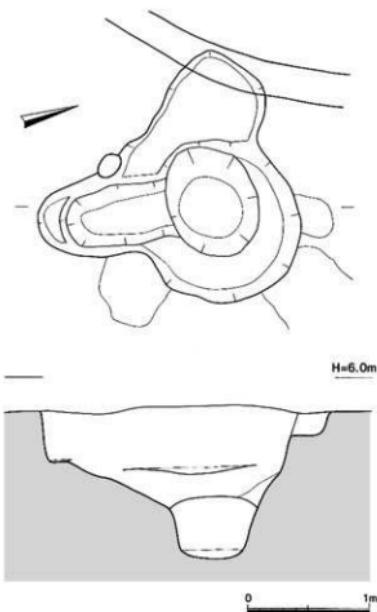


Fig.12 SE100 実測図 (1/40)

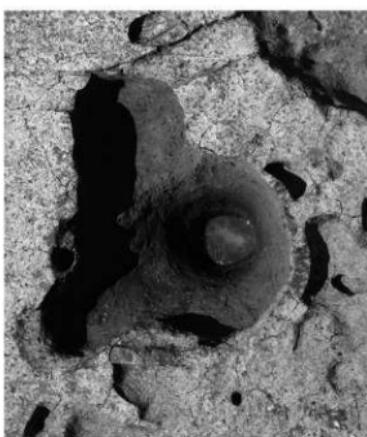


Fig.13 SE100 (東から)

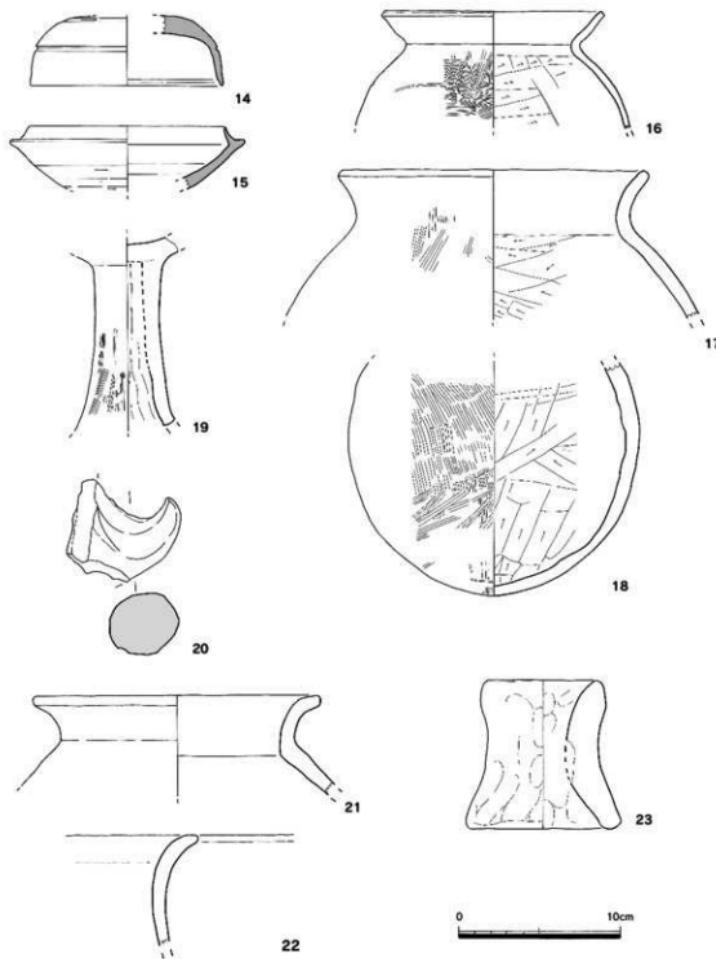


Fig.14 SE100 出土遺物実測図① (1/3)

長2.6mで楕円形を呈する。本調査区で検出された井戸の中では最も大きい。深さは約1.6mを測り、標高5.0m付近で湧水した。底面は平坦で楕円形を呈する。底面から0.4m上までは壁体がほぼ垂直に立ち上がる。それより上部はやや広がり、底部から約0.8m上で段を有する。埋土の層序は上から茶褐色粘質土、灰褐色粘質土、黒灰褐色粘質土で、中層の灰褐色粘質土では長さ約90cmの自然木や20cm大の石を検出している。これらは井戸が廃絶し、ある程度埋まった段階で、廃棄されたものと考えられる。

[SE217出土遺物(Fig.17,PL.2)]

須恵器および土師器、土製品、石製品が出土した。41～43は須恵器である。41は壺蓋である。つまみより下の天井部外面には回転ヘラケズリ、それ以外の外面および内面には回転ナデが施されている。42は壺身で底部外面にはヘラ記号が認められる。43は高台付の壺である。底部内外面にはナデ、それ以外には回転ナデが施される。44～47は土師器である。44は壺で、底部には回転ヘラ切と板状圧痕がみられる。45は高台付の壺である。底部外面にはユビナデ、内面には研磨がみられる。44・45は上層の混ざり込みの可能性がある。46・47は瓶の把手である。48～52は土錘で、48は長さ約7.0cm、径約1.6～1.8cmを測る。53は砥石で表裏に研磨痕跡が認められる。

(2)溝

I・II区で計5条の溝を検出した。また、周辺の調査地で検出されている並列二条溝と推定される溝状の造構がI区で確認されたため、本項で述べることとする。

SD013(Fig.18)

I・II区の中央よりやや北側で検出された溝である。最大幅約0.6m、深さ約0.15～0.2mを測る。埋土は細かな地山ブロックを含む茶褐色土である。須恵器や土師器などの土器片が出土しているが、いずれも細片で図化し得なかった。西側は調査区外へと続いているが、東側は搅乱で削平され、不明である。SD207と同一の溝である可能性も想定される。

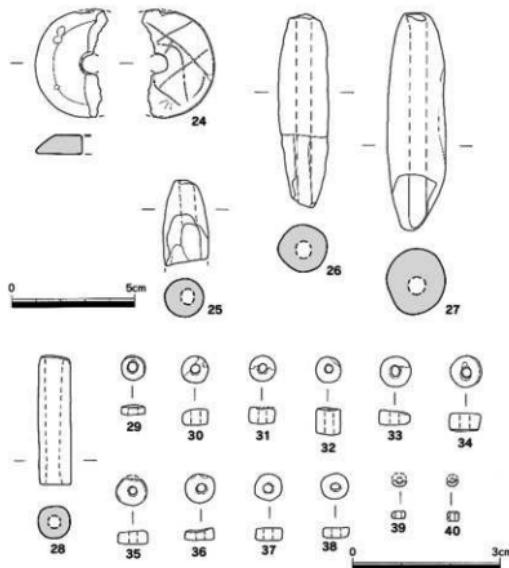


Fig.15 SE100 出土遺物実測図② (1/2・1/1)

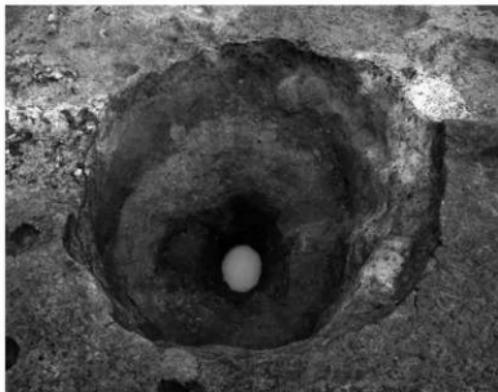


Fig.16 SE217 (北西から)

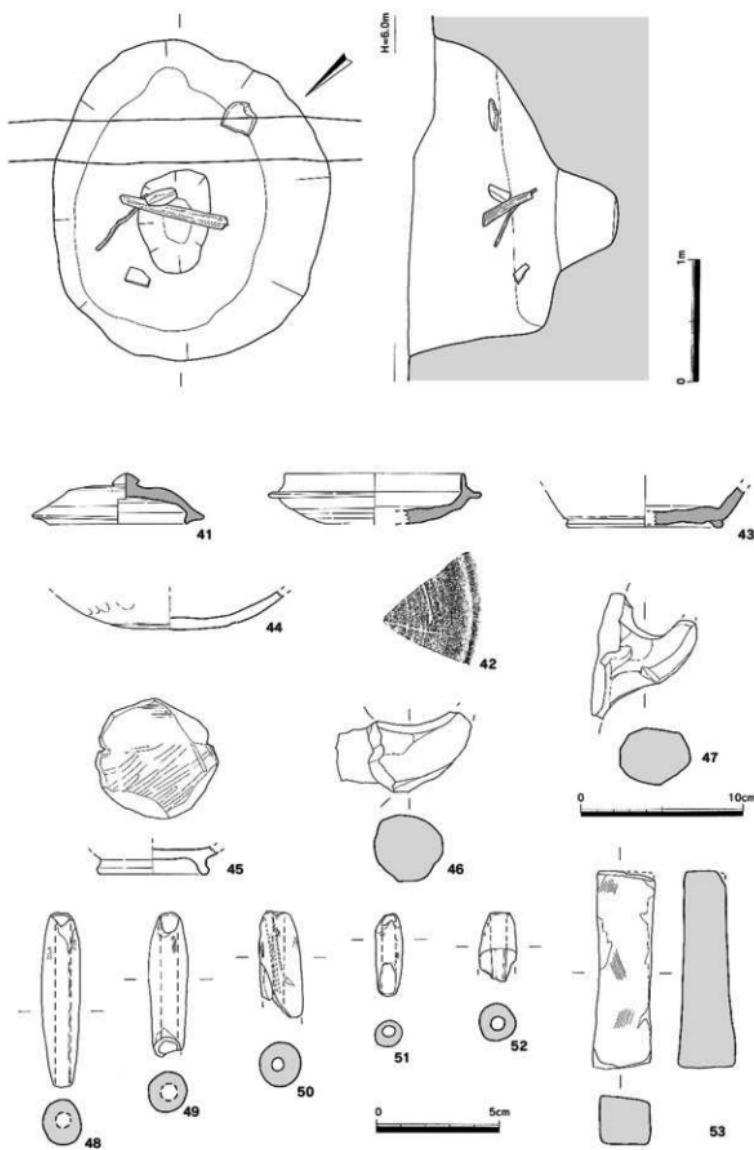


Fig.17 SE217 実測図 (1／40) および出土遺物実測図 (1／3・1／2)

SD032(Fig.18)

I区の西側で検出された古墳時代中期の溝である。I区の北西隅から東側で検出されているが、それ以上東側で溝のつながりを確認することができなかった。最大幅約0.8m、深さ約0.25mを測り、底面には凹凸が認められる。埋土の主体は地山ブロックを多く含んだ黒茶褐色の粘質土である。

[SD032出土遺物(Fig.18)]

弥生土器および須恵器、土師器が出土した。54・55は弥生土器で、54は甕、55は高環の脚部である。56・57は須恵器で56は环蓋、57は高環の环身である。58は甕の把手のみが残存する。

SD107(Fig.18)

I・II区の中央よりやや北側で検出された7世紀前半～中頃の溝である。西側は攪乱で確認できないが、東側は調査区外へと続いている。SD111と並び、やや蛇行する。最大幅約0.45m、深さ約0.2mを測る。埋土の主体は地山ブロックを含んだ黒褐色土である。

[SD107出土遺物(Fig.18)]

須恵器および土師器、土製品が出土した。59は須恵器の环身である。60～62は土師器で、60・61は高环の脚部、62は甕の把手である。63は土鍤である。残存長約4.2cm、幅約1.3cmを測る。

SD111(Fig.18)

I・II区の中央よりやや南側で検出された7世紀前半の溝である。西側では溝の延長を確認することができず、東側は調査区外へと続いている。SD107と並び、やや蛇行する。最大幅約0.35m、深さ約0.2mを測る。埋土は上層が黒褐色土、下層が暗褐色土である。

[SD111出土遺物(Fig.18)]

須恵器および土師器、瓦、土製品、石製品が出土した。64・65は須恵器の环身である。65では底部外面にヘラ記号が認められる。66は甕の把手である。67・68は平瓦である。欠損しているため長さや幅は不明であるが、厚さは約1.2cmを測る。68では凸面に平行タタキ、凹面に布目痕跡が認められる。69は土鍤である。残存長3.4cm、径1.7～1.8cmを測る。70は石庖丁で、残存長約6.0cm、残存幅約6.4cm、孔径約0.4cmである。

SD207(Fig.18)

II区北側で検出された溝である。西側は調査区外へと続き、東側は屈曲しているが、攪乱によって削平されている。最大幅約0.6m、深さ約0.15mを測る。埋土は細かな地山ブロックを含んだ褐色土である。須恵器や土師器などの土器片が出土しているが、いずれも細片で図化し得なかった。SD013と同一の溝である可能性も考えられる。

SD015・035・074・165(Fig.19・20)

周辺の調査地で並行して延びる2条の溝が検出されており、那珂遺跡群から比恵遺跡群の丘陵上を通る道路状遺構の側溝と考えられている。I区ではこの並列2条溝の推定ライン上で不連続な溝状遺構を検出した。SD015とSD074はI区の中央よりやや東側、SD035とSD165はI区の西側に位置する。溝の東側にあたるSD015・074のラインと西側にあたるSD035・165のラインの間隔は内側の上端で約5.8～6.0mを測る。埋土の主体は地山ブロックを含んだ暗褐色粘質土である。溝の東側にあたるSD015・074は幅40～50cm、深さ15～20cm、西側にあたるSD035・165は幅30～70cm、深さ15～20cmを測る。いずれも鳥栖ロームの基盤層が削平され、八女粘土の面で検出されているため、溝の上部が大きく削平され、溝の底部付近が残存したものと考えられる。

[SD015・035出土遺物(Fig.19)]

SD015・035・074・165では弥生土器および土師器が出土した。なお、SD074およびSD165では土器細片のみが出土したため、図化し得なかった。

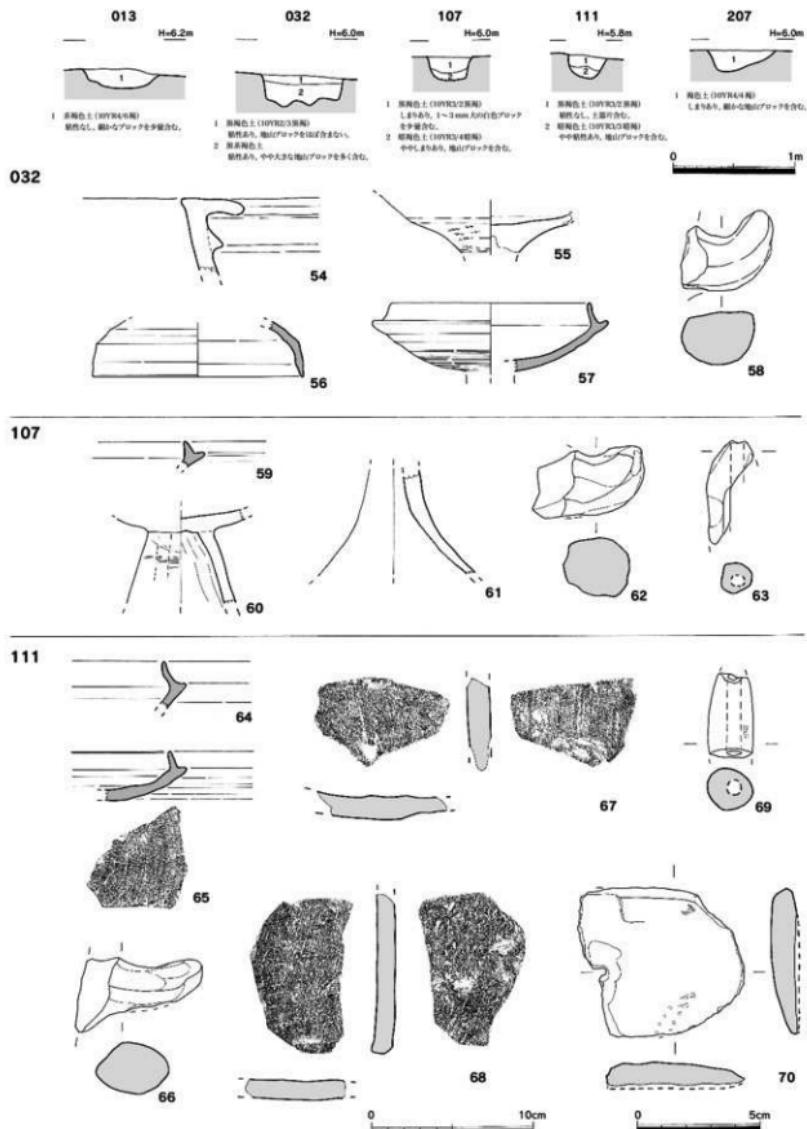


Fig.18 SD013・032・107・111・207 土層図 (1 / 40) および出土遺物実測図 (1 / 3・1 / 2)

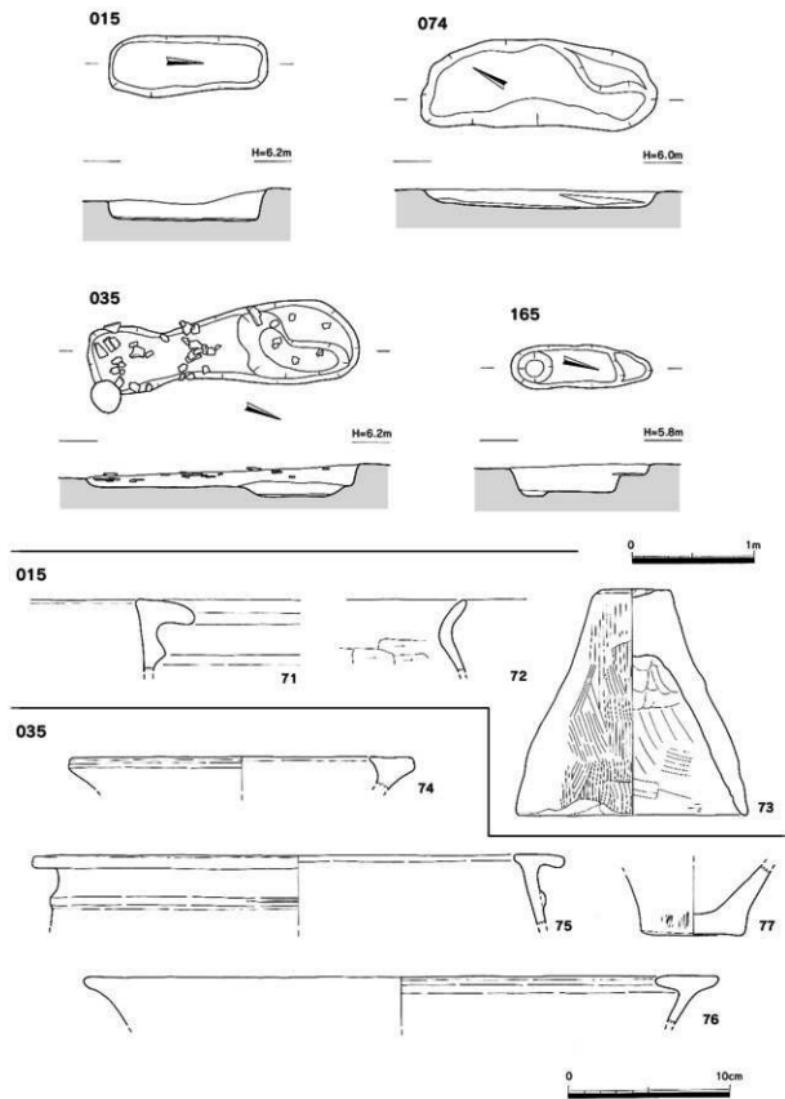


Fig.19 SD015・074・035・165 実測図 (1 / 40) および出土遺物実測図 (1 / 3)

71～73はSD015で出土した。71・73は弥生土器である。71は壺の口縁部で内外面ともに摩滅しており、一部にヨコナデがみられる。73は支脚で外面にハケメが認められる。72は土師器の壺口縁部で、内面にはヘラケズリがみられる。74～77はSD035で出土した。74～77は弥生土器である。74は壺の口縁部とみられる。75は壺の口縁部、76は壺の口縁部で、いずれも外面に丹塗りの痕跡が若干認められる。77は壺の底部で、外面にはハケメがみられる。

(3)土坑

土坑は多数検出したが、その多くが、上部が削平され底面がわずかに残存するものや遺物が少量しか検出されなかったものであった。本項では比較的残存状態が良かった土坑を中心に報告する。

SK019(Fig.21)

I区中央よりやや東側に位置する古墳時代初頭の土坑である。北西側をSD111に切られる。標高約5.8mで検出され、深さは約0.3mを測る。平面プランは南北最大長約0.8m×東西最大長約0.6mの楕円形を呈する。上層の茶黒褐色土では土器片が多く出土した。

[SK019出土遺物(Fig.21)]

土師器が出土した。78・79はいずれも上層で検出されたものである。78は鉢で橙色を呈する。内外面とともに摩滅している。79は壺で明赤褐色を呈する。

SK110(Fig.22)

I区東側で検出された古代の土坑である。標高約5.6mで検出され、深さは約0.6mを測る。平面プランは南北最大長約0.8m×東西最大長1.7mの隅丸長方形を呈する。上層の暗褐色土では土器片とともに約60cmの木片が検出されたが、明瞭な加工痕は認められなかった。

[SK110出土遺物(Fig.22)]

須恵器および土師器、瓦が出土した。80は壺蓋で胎土に白色粒を少量含む。81は壺身で内外面ともに回転ナデが施される。82は壺で外面にはタタキの後にカキメが施され、内面には同心円状の当て具痕がみられる。84は瓦で凹面に布目痕跡がみられる。

SK101・139・140(Fig.23)

I区中央東側で検出された土坑で、いずれもSD111に切られる。遺構の切り合いからSK140→101→139の順で形成されたと考えられる。SK139の平面プランは南北長約1.3m×東西長約1.5mで不定形を呈する。SK101は楕円形、SK140は不定形の平面プランと推定される。埋土の主体はSK101が地山ブロック



Fig.20 SD035 (南から)

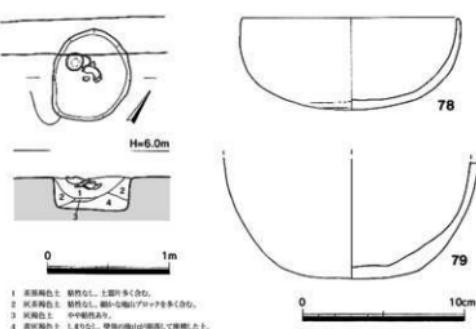


Fig.21 SK019 実測図(1/40)および出土遺物実測図(1/3)

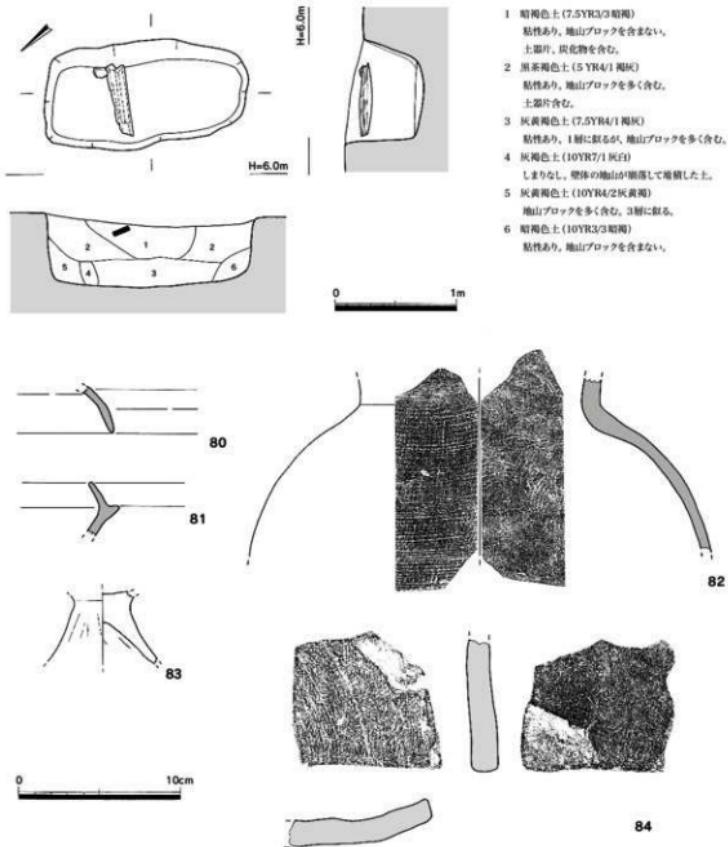
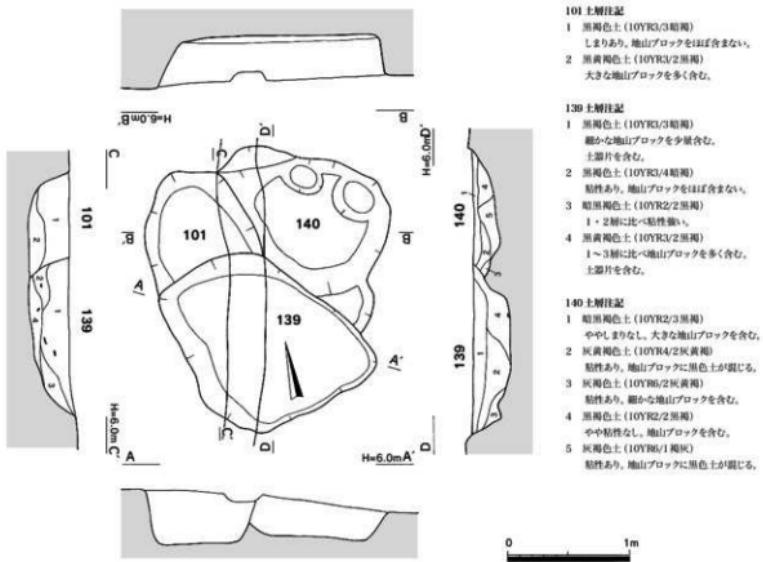


Fig.22 SK110 実測図 (1/40) および出土遺物実測図 (1/3)

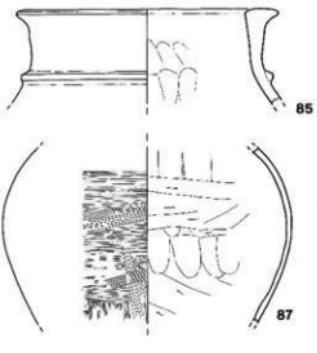
クをほぼ含まない黒褐色土、SK139が地山ブロックを含む黒褐色土、SK140が灰褐色土である。

[SK101・139出土遺物(Fig.23)]

SK101・139・140では弥生土器および土師器が出土した。なお、SK140では土器細片が出土したため図化し得なかった。85～88はSK101で出土した。85は弥生土器の壺で外面は橙色を呈する。内面にはユビナデの痕跡がみられる。86～88は土師器で、86・87は甌である。86は外面が灰白色、内面がにぶい黄褐色を呈し、胴部内面にはヘラケズリが施される。87はにぶい黄褐色を呈し、外面の一部に煤が付着する。外面にハケメ、内面にユビナデ後ヘラケズリが施されている。88は下層で出土した鉢である。灰白色を呈し、外面にミガキの痕跡が認められる。89～91はSK139で出土した土師器である。89は甌で内外面ともににぶい黄褐色を呈し、口縁部に煤が付着する。胴部内面にはヘラケズリがみら



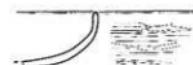
101



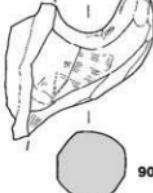
139



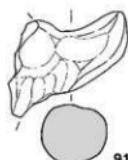
86



88



90



10cm

Fig.23 SK101・139・140 実測図 (1 / 40) および出土遺物実測図 (1 / 3)

れる。90・91は甌の把手で、90はハケメとナデ、91はユビナデが認められる。

SK030(Fig.24)

I区中央よりやや西側で検出された弥生時代中期～後期の土坑である。標高約5.7mで検出され、深さは約0.45mを測る。平面プランは南北長約0.7m×東西長約0.8mの梢円形を呈する。埋土の主体は黒褐色土である。

[SK030出土遺物(Fig.25)]

弥生土器が出土した。92・93は壺の口縁部で、92の内外面にはナデがみられ、93の外面には煤が若干付着する。94は甌で、胎土に白色の微細粒を多く含み、外面は明赤褐色～灰褐色を呈する。

SK057(Fig. 24)

I区西側で検出された弥生時代後期の土坑である。北側はSD111、北西側と西側は別の土坑に切られる。標高約5.8mで検出され、深さは約0.25mを測る。

[SK057出土遺物(Fig.25)]

弥生土器が出土した。95は壺の頸部片で、内外面ともに赤橙色を呈する。96は甌で胎土には白色粒を多く含む。内面は褐灰色を呈し、ハケメとユビオサエが認められる。

SK083(Fig.24)

I区中央よりやや東側で検出された古代の土坑である。標高約5.8mで検出され、深さは約0.6mを測る。平面プランは南北長約0.8m×東西長約0.65mで梢円形、底部は0.4m×0.4mの方形を呈する。埋土は地山ブロックを含む黒褐色土である。

[SK083出土遺物(Fig.25)]

須恵器および土師器が出土したが、土師器は細片で図化し得なかった。97・98は須恵器の坏身である。97は底部外面にヘラケズリ、それ以外に回転ナデが施されている。

SK097(Fig.24)

I区東側で検出された古代の土坑である。標高約6.0mで検出され、深さは約0.2mを測る。平面プランは南北長約0.8m×東西長約0.7mの梢円形を呈する。南側の壁体はややオーバーハングしている。埋土は黒褐色の粘質土である。

[SK097出土遺物(Fig.25)]

須恵器が出土した。99は坏蓋で天井部外面に回転ヘラケズリが施される。100は坏身で底部外面にヘラケズリがみられる。

SK099(Fig.24)

I区東隅で検出された古代の土坑である。標高約6.0mで検出され、深さは約0.3mを測る。東側が調査区外へと続くが平面プランは梢円形を呈すると推定される。埋土は黒褐色の粘質土である。

[SK099出土遺物(Fig.25)]

弥生土器および須恵器、玉類が出土した。101は弥生土器の甌で、内面にハケメがみられる。102は須恵器の坏身である。口縁部外面から内面は回転ナデ、それ以外にヘラケズリが施される。103は甌の底部か。器面は褐灰色を呈する。外面にハケメ、外面底部にナデ、内面にヘラケズリとナデが施される。104は滑石製の白玉で、小口はやや斜めになっている。直径約0.55cm、厚さ約0.15～0.2cm、孔径約0.15cmを測る。

SK128(Fig.24)

I区中央やや南側で検出された土坑である。標高約5.8mで検出され、深さは約0.4mを測る。平面プランは南北長約0.8m×東西長約1.6mの不定形を呈する。

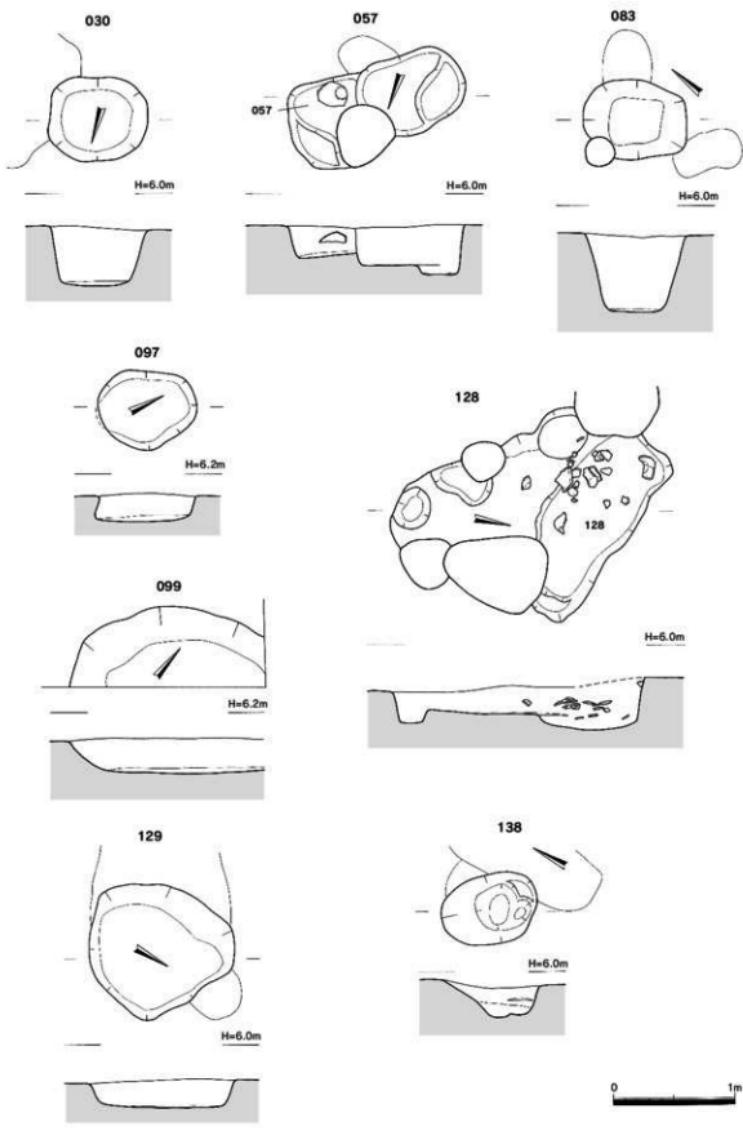


Fig.24 各土坑実測図 (1 / 40)

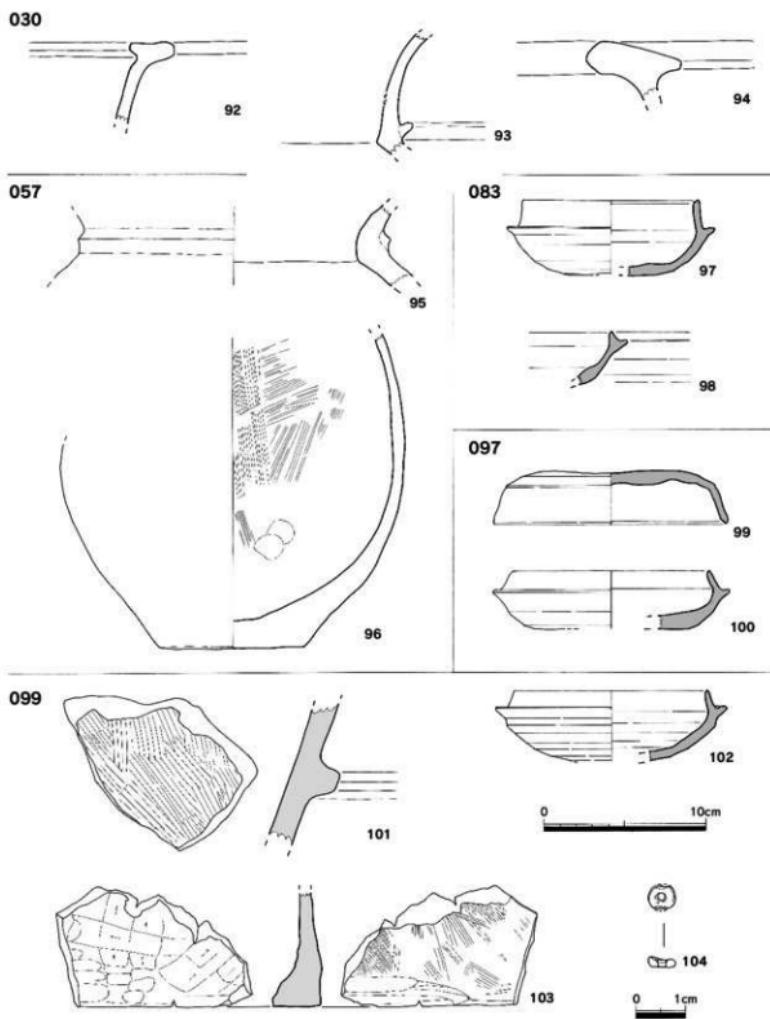


Fig.25 各土坑出土遺物実測図① (1 / 3 · 1 / 1)

[SK128出土遺物(Fig.26)]

弥生土器および土師器が出土した。105は高环脚部で丹塗りの痕跡が残る。106～108は土師器である。106は甕で胸部外面はハケ後ミガキが施される。107は鉢、108は高环の环部である。

SK129(Fig.24)

I区中央よりやや南側で検出された古墳時代初頭の土坑である。標高約5.7mで検出され、深さ約

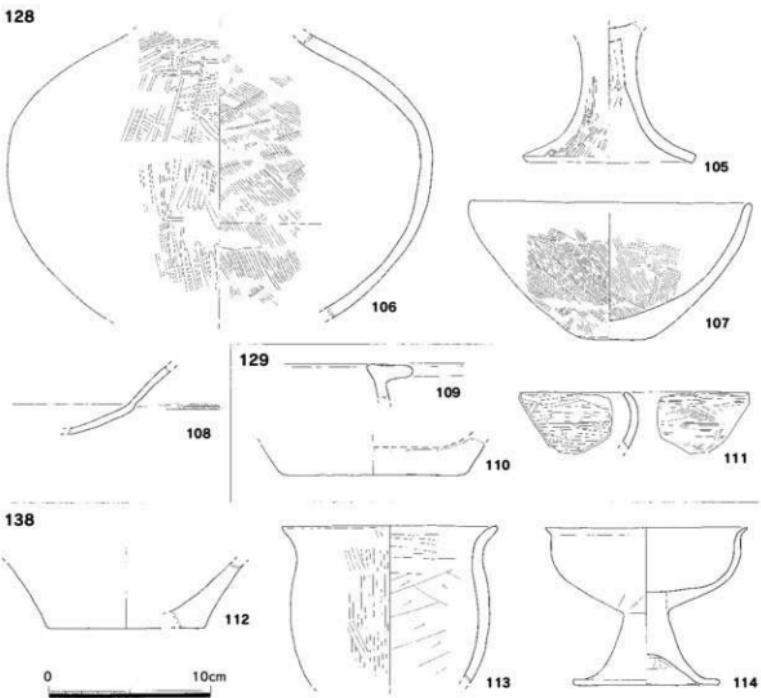


Fig.26 各土坑出土遺物実測図② (1 / 3)

0.4mを測る。平面プランは南北長約1.1m×東西長約1.1mの不定形を呈する。埋土は地山ブロックを含まない黒褐色の粘質土である。

[SK129出土遺物(Fig.26)]

弥生土器と土師器が出土した。109・110は弥生土器である。109は甕の口縁部でヨコナデが認められる。110は甕の底部で内面は剥離している。111は土師器の鉢口縁部である。内面から外面口縁部にかけては黒色、それ以外は灰白色を呈する。内外面ともにミガキが施されている。

SK138(Fig.24)

I区中央よりやや西側で検出された古代の土坑である。標高約5.9mで検出され、深さ約0.3mを測る。平面プランは南北長約0.8m×東西長約0.6mの楕円形を呈する。

[SK138出土遺物(Fig.26)]

弥生土器および土師器が出土した。112は弥生土器の甕底部で器面は磨滅している。113は土師器の甕で外面にはハケメ、胴部内面にはヘラケズリが施されている。114は高環である。外面には黒斑がみられ、環の底部外面と脚部内面には工具痕とみられる沈線が認められる。

SK222(Fig.27-28)

II区南東側で検出された古代の土坑である。包含層の下、標高約5.6mで検出され、深さ約0.4mを測る。平面プランは南北長約1.5m×東西長約1.1mの不定形を呈する。壁体は上部に向かって広がりながら立ち上がり、東側にはテラス状の段が認められる。埋土の主体は灰褐色の粘質土で、底面から約0.2m上では須恵器や土師器、木片が検出された。

[SK222出土遺物(Fig.27)]

須恵器および土師器が出土した。115・116は須恵器の壊身である。ともに外面底部に回転ヘラケズリが施される。115は青灰色、116は灰白色を呈する。117は土師器の壺である。内外面ともに褐灰色を呈する。胴部内面にはヘラケズリ、それ以外にはナデが施される。118は瓶の把手である。胎土には白色粒を多く含み、褐灰色を呈する。ハケメとユビオサエが施される。

SK224(Fig.29-30)

II区東側で検出された古代の土坑でSD111に切られる。標高約5.7mで検出され、深さ約0.6mを測る。平面プランは確認できる範囲で南北長約2.0mを測り、円形と推定されるが、東側が調査区外へと続くため、不明確である。埋土は上層が暗褐色土、下層が黒褐色の粘質土である。

[SK224出土遺物(Fig.29)]

須恵器および土師器、瓦、石製品が出土した。119・120は須恵器の壊身である。119は内外面ともに灰色を呈し、一部に灰被りが認められる。

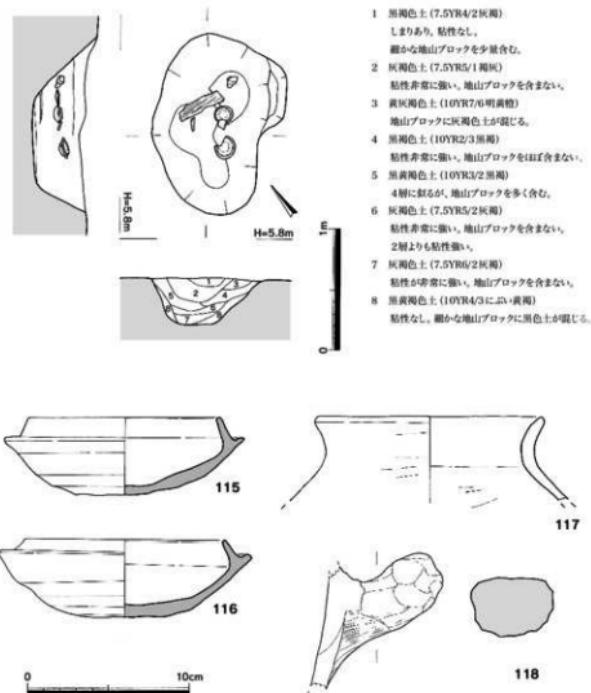


Fig.27 SK222 実測図(1/40) および出土遺物実測図(1/3)

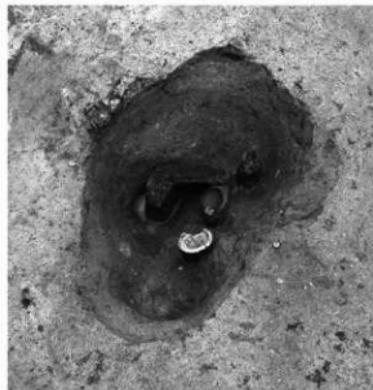


Fig.28 SK222 (南から)

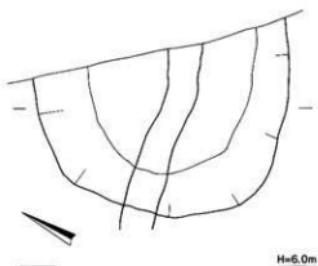
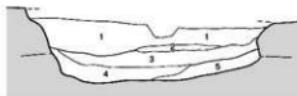
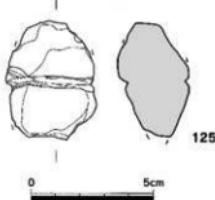
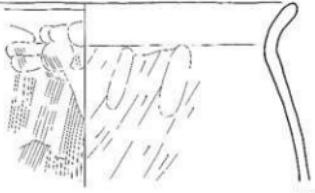
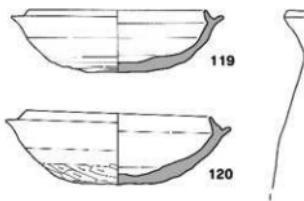


Fig.30 SK224 (南西から)



- | | |
|---|---|
| 1 暗褐色土 (10YR2/3暗褐)
しまりあり、細かな地山ブロックを含む。
炭化物を少量、上部片を多く含む。 | 4 黒褐色土 (10YR2/3黒褐)
しまりあり、細かな地山ブロックを少量含む。 |
| 2 黑褐色土 (7.5YR3/1黒褐)
しまりあり、粘性強い。 | 5 灰白褐色土 (5YR8/2灰白色)
ややしまりなし。地山ブロックを多く含む。 |
| 3 黑褐色土 (7.5YR3/1黒褐)
しまりあり、炭化物を少量含む。 | |

0 1m



0 10cm

Fig.29 SK224 実測図 (1 / 40) および出土遺物実測図 (1 / 3 · 1 / 2)

120は内外面ともに灰白色を呈し、底部外面にはヘラケズリがみられる。121・122は土師器である。121は甕で口縁部は緩やかに外反する。内外面ともに灰白色を呈し、外面にはハケメ、内面にはヘラケズリとユビナデが施される。122は高环の脚部で残存高約6.8cmを測る。灰白色を呈し、内面にはヘラケズリ、外面にはハケメ後にナデ、ユビナデが施されている。123は須恵器の皿である。上層で出土した。124は平瓦である。欠損しているため、全長や幅は不明であるが厚さは約1.7cmを測る。凹面はにぶい橙色、凸面は灰白色を呈する。器面は磨滅しているが、凸面の一部にタタキの痕跡がみられる。125は石錘である。残存長約4.7cm、最大幅約3.5cm、最大厚約2.9cmを測る。

(4) 不明遺構

SX115(Fig.31)

I区南東側で検出された。標高約5.7mで検出され、深さは約0.9mを測る。平面プランは南北長約0.9m、東西長約1.0mで楕円形を呈する。底部は平坦で、壁体はほぼ垂直に立ち上がる。埋土の主体は上層が黒褐色土、下層が灰褐色土の粘質土である。遺物が1点も出土せず、不明遺構とした。落とし穴の可能性も考えられる。

SX043(Fig.32~35)

I区の南隅で検出された段落ちで、南側は調査区外へと続いている。検出面の標高は約5.6mを測る。黒褐色の砂質土と黄褐色の粗砂が堆積しており、深さを確認するため調査終了間際に重機で半截した結果、少なくとも標高約4.3mまで堆積を確認することができた。標高4.6m付近でFig.32・33のように樺や杭などの木製品や自然木が検出さ

れた。また、Fig.35に示した土器片や石器も出土した。SX043の北側では小穴状の浅い窪みが多数検出されている。

樺が出土していることや自然木の検出状態から船着場として利用されていた可能性がある。周辺は低湿地状になっていたと考えられ、SX043の北側で検出されている浅い窪みについては人為的なものではなく、自然に形成された凹凸の可能性が考えられる。

[SX043出土遺物(Fig.35,PL.2)]

弥生土器および石器、木製品などが出土

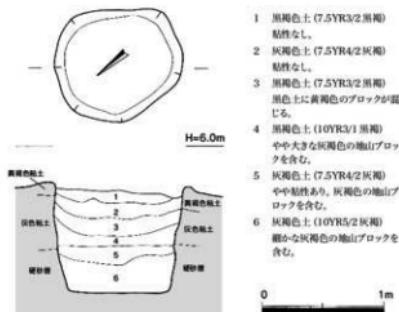


Fig.31 SX115 実測図 (1 / 40)



Fig.32 SX043 (西から)

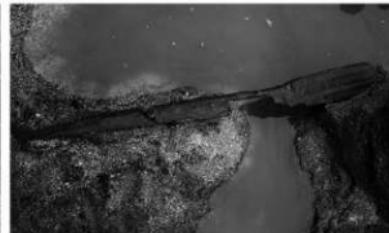
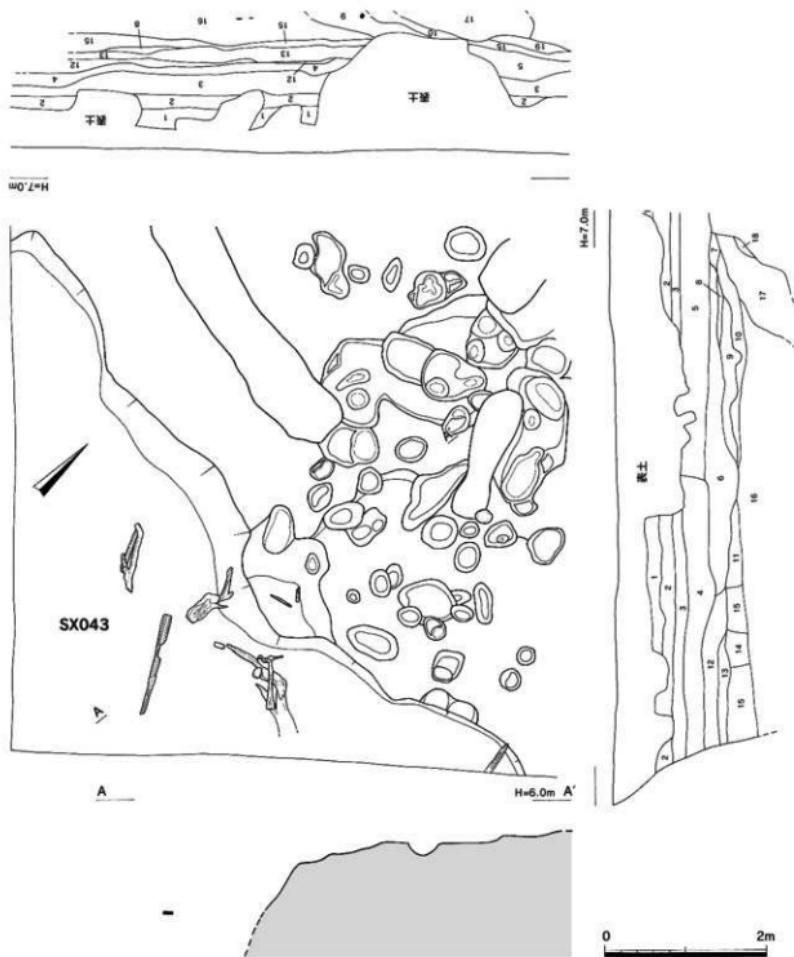
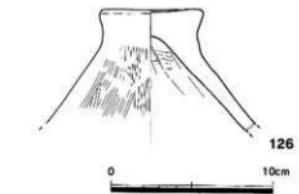


Fig.33 SX043 横出土状況 (北東から)



- 1 明赤褐色土 (5YR5/6明赤褐)
ロームブロックによる整地層。
- 2 黄褐色土 (2.5YR4/3オリーブ褐色)
しまりあり、1~3 mm 大の地山ブロックを含む。
- 3 黄褐色土 (10YR5/4にひく黄褐)
しまりあり、1~3 mm 大の地山ブロックを少量含む。
- 4 黄褐色土 (7.5YR4/3褐)
しまりあり、1~3 mm 大の地山ブロックを含む。
- 5 灰黄褐色土 (10YR4/2灰黄褐)
しまりあり、1~5 mm 大の地山ブロックを含む。
- 6 黑褐色土 (10YR5/2黒褐)
しまりあり、1~3 mm 大の地山ブロックを含む。
2~5 mm 大の炭化物を少量含む。土器片含む。
- 7 黑褐色土 (10YR5/2黒褐)
6層に似るが、堆山ブロックを多量に含む。
- 8 灰灰褐色土 (5GY4/1暗オリーブ灰)
細砂層。
- 9 黑褐色土 (10YR5/2黒褐)
3 mm 大の砂層。
- 10 茶灰褐色土 (5BD4/1暗青灰)
細砂層。
- 11 灰灰褐色土 (2.5GY4/1暗オリーブ灰)
砂質土。中砂にまじり。
- 12 黑褐色土 (7.5YR4/3褐)
しまりあり、5~10 mm 大の炭化物を含む。
植物を多く含む。
- 13 灰褐色土 (10YR5/3灰褐)
しまりあり、1~3 mm 大の地山ブロックを少量含む。
- 14 黑褐色土 (5YR2/2オリーブ黒)
砂質土。しまりなし。木片を少量含む。
- 15 灰黄褐色土 (10YR4/2灰黄褐)
砂質土。しまりなし。
- 16 灰黄褐色土 (10YR6/2灰黄褐)
粗砂層。
- 17 黑色土 (10YR2/1黒)
砂質土。しまりなし。
- 18 灰灰褐色土 (7.5GY4/1暗灰)
細砂層。
- 19 黄褐色土 (10YR6/3にひく黄褐)
地山ブロック層上に黑色土が混じる。

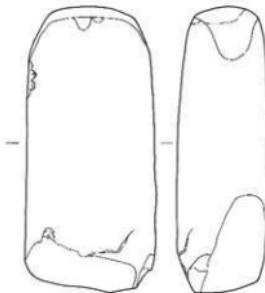
Fig.34 SX043 実測図 (1 / 60)



126

0

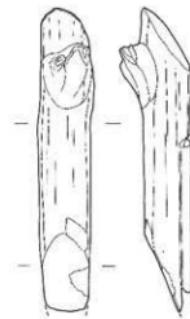
10cm



127

0

5cm



128

0

30cm



129

Fig.35 SX043 出土遺物実測図 (1 / 3 · 1 / 2 · 1 / 6)

した。126は弥生土器の蓋である。残存高は7.6cm、つまみ部の径は約6.4cmを測る。外面はにぶい黄橙色、内面はにぶい黄橙～灰黄褐色を呈する。外面にはハケメ後ヨコナデ、内面には板ナデの痕跡が認められる。127は磨石である。全長11.5cm、最大幅5.3cm、最大厚3.9cmを測る。128・129は木製品である。128は柾である。中央付近は欠損しているが、全長114cm、最大幅10.2cm、最大厚2.8cmを測る。129は杭である。自然木の上下端を斜めにカットしたもので、最大長37.2cm、最大幅8.8cm、最大厚7.2cmを測る。出土した土器などの年代は弥生時代後期と推定される。

(5) 包含層出土(Fig.36・PL.2)

II区では全体的に包含層の堆積が認められたが、特に中央より南側、SD107付近を境に南側が20cmほど低くなってしまっており、その低地に黒褐色の包含層が堆積していた。包含層では土師器や須恵器などの土器片や土製品、石製品、鉄製品、硯などが出土した。出土した土器の年代から7世紀代に堆積した包含層と考えられる。以下では特殊遺物を中心に報告するが、獸脚円面硯については次項で述べる。

130はII区南側の包含層で出土した釘である。残存長3.5cmで頭部は長さ0.6cm、幅0.7cmの梢円形、脚部は一辺が0.45cmの方形を呈する。131・132は土錘である。131はII区の北東側、132はII区南側の包含層で出土した。131は胎土に白色砂粒を含み、淡茶褐色を呈する。長さ7.3cm、最大径2.0cmを測る。132は明茶褐色を呈し、長さ6.6cm、最大径2.05cmを測る。133は砥石である。II区南側の包含層で出土した。残存長4.3cm、幅2.55cm、厚さ0.85cmを測り、表裏ともに研磨の痕跡が認められる。大きさから手持砥石と考えられる。134はII区南側の包含層で出土した。滑石製で、残存長2.4cm、最大幅3.1cm、厚さ1.0cmを測る。方形を呈するが、左右がややくびれている。中央には直径0.2cmの孔が穿たれており、穿孔内と欠損面以外は丁寧な研磨が確認できる。135はII区北側の包含層で出土した。残存長3.9cm、幅6.0cm、厚さ1.0cmを測る。表面は欠損面以外の三方向で面取りがなされている。裏面は地山に接し、マンガンの付着によって黒色化している。黒色化により調整が不明確であるが、研磨痕跡が認められる。裏面の凹みや、表面の剥離痕跡と面取りから、硯の可能性を考えられる。なお、135については國學院大學客員教授の柳田康雄氏にご助言いただいた。

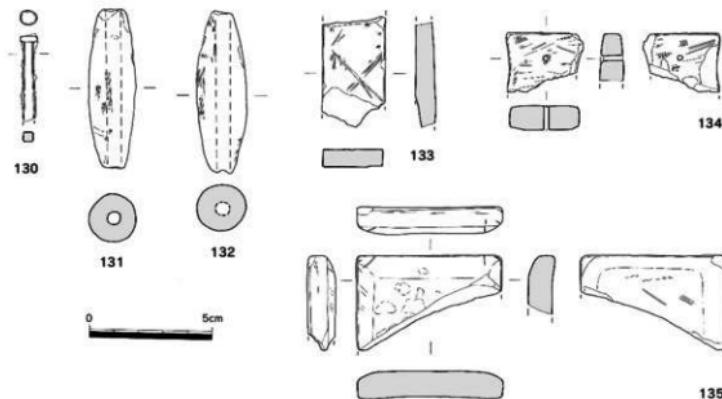


Fig.36 包含層出土遺物実測図 (1 / 2)

(6) 獣脚円面観(Fig.37-PL.2)

獣脚円面観の脚部片がI・II区合わせて2点出土した。獣脚円面観については隣接する那珂遺跡群で出土しているが、比恵遺跡群の中で出土したのは今回が初めてである。そのため、特筆すべき遺物として本項で取りあげ、詳細を述べることとする。

136はII区南側の包含層、137はI区北西側のSX118で出土した。SX118は不定形で深さは5cmほどである。明確な構造ではなく、浅い窪地に遺物が溜まったものと推定される。

136は残存高3.9cmを測り、脚底部は長軸2.6cm、短軸1.8cm、脚部は長軸2.1cm、短軸1.4cmである。胎土には1～2mmの白色砂粒を少量含む。焼成は良好でやや硬質である。器面の色調は紫がかかった暗赤褐色を呈する。脚部の前面下半には押圧施文がなされ、鋸歯文が施されている。137で認められる鋸歯文上縁の突線はつくり出されていない。前面上半と背面には縦方向のケズリが認められる。底面端部にはナデがみられ、紋様の一部はナデによって消されている。なお、136の上端中央には凹みが認められる。他遺跡で出土した獣脚円面観では脚部を観の縁台下面の外端に貼付し、縁台端面を横向にケズリ込んで脚頭をつくりこんでおり(註1)、この凹みは観の縁台に貼付していた痕跡と考えられる。137は残存高3.9cmを測り、脚底部は長軸3.1cm、短軸2.3cm、脚部は長軸2.5cm、短軸2.2cmである。胎土には1～2mmの白色砂粒を含む。焼成は良好で硬質である。器面の色調は青灰色を呈する。136と同様に脚部の前面下半には押圧施文が施されている。136とは異なり、鋸歯文の上縁に突線2本が認められるが、前面上半のケズリによって紋様上端は消されている。底面端部にはナデがみられ、紋様の一部はナデによって消されている。また、前面上半と背面には縦方向のケズリが認められる。

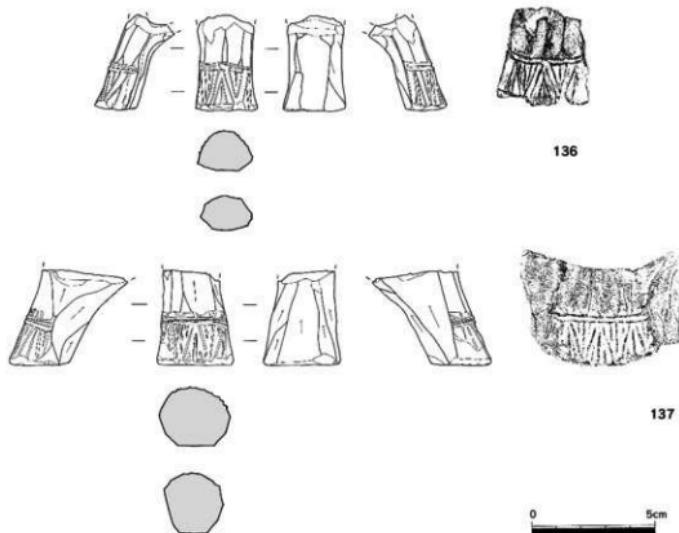


Fig.37 獣脚円面観実測図 (1 / 2)

136 に比べて 137 の方が施文の幅がやや広く、また、137 はケズリによる稜が際立っており、横断面では明瞭な面をなしている。

136 と 137 は胎土や器面の色調、調整などの違いから別個体の硯の脚部と考えられる。2 点はいずれも脚部片であることから、獸脚円面硯の構造を復元することはできない。しかし、136・137 でみられる紋様は他遺跡で出土した獸脚円面硯に類似している。また、136 では縁台に貼付していた痕跡が認められることから、他遺跡出土例と同様の獸脚円面硯であったと想定される。

註 1: 白井克也 2004 「筑紫出土の獸脚硯」『九州考古学』第 79 号 九州考古学会

IV. まとめ

比恵遺跡群におけるこれまでの調査では、旧石器時代から中世にいたる遺物や遺構が多数検出されており、集落が連続して営まれていたことがうかがえる。第 141 次調査は比恵遺跡群の南端に位置しており、那珂遺跡群との境の谷の落ち際にあたる。今回の調査では、主に弥生時代終末～古墳時代初頭と古代に関する遺構や遺物が多く検出された。弥生時代終末～古墳時代初頭にかけての遺構の内、特に注目されるのは調査地の西側で検出された溝状遺構である。本調査地の北西にあたる 45・62・99 次調査において、弥生時代終末期～古墳時代初頭にかけての道路の側溝と推定される並列の 2 条溝が検出されている (Fig.38)。この溝は比恵遺跡群から那珂遺跡群にかけて延びていることが確認されており、その推定ライン上で溝状遺構が検出された。一連の溝ではなく不連続を呈すが、調査地全体が大きく削平され、八女粘土面での検出となつたため、溝の最深部のみが残存しているものと推定される。

古代に関する遺構は井戸や土坑、溝などが検出され、そのほとんどが調査区の南側に位置している (Fig.38)。そのうち 2 基の井戸については最底面で丸みを帯びた小石が多数検出されており、透水性を高めるために敷かれたものと考えられる。溝に関しては調査区を東西に横断する溝が 2 条検出されている。SD107 と SD111 がそれにあたるが、出土土器の時期と遺構の切り合いから、SD111 がやや先行すると推定される。本調査地の東側にあたる 128 次調査においても東西にのびる古代の溝が検出されており、本調査地内に延びると想定される。検出位置でみると SD107 につながる可能性も考えられるが、現状では確定することができない。なお、調査区の南側で検出された SX043 では、櫂や杭といった木製品や自然木などが出土した。出土した土器は弥生時代後期のものである。SX043 の周辺では人為的ではない、浅い窪みが多く認められることから、低湿地帯であったと推定される。船着場であった可能性が考えられるが、SX043 の南側は調査区外へと続いているため、今後の周辺調査の進展とともに今後検討すべき課題である。

遺物は弥生土器や土師器、須恵器などをはじめ、多くの遺物が出土した。古代の遺物も多く出土しているが、特筆すべきものとして獸脚円面硯と古代瓦がある。古代瓦については器面が淡黄赤褐色を呈し、凸面に平行タタキ、凹面に布目痕跡が認められる。7 世紀前半～中頃に推定される土坑や溝などから数点出土した。獸脚円面硯については比恵遺跡群において初めての出土となる。脚部片が 2 点出土したが、胎土や法量に違いがあることから別個体の硯の脚部とみられる。本調査地の南側に位置する那珂遺跡群では古代の官衙的な施設や郡衙、寺院の存在が示唆されており、古代瓦と獸脚円面硯が出土している。本調査地では建物跡などを確認できていないが、那珂遺跡群に近い立地であることに加え、硯や瓦が出土していることから、古代の官衙的な施設や寺院などとの関連性がうかがえる。

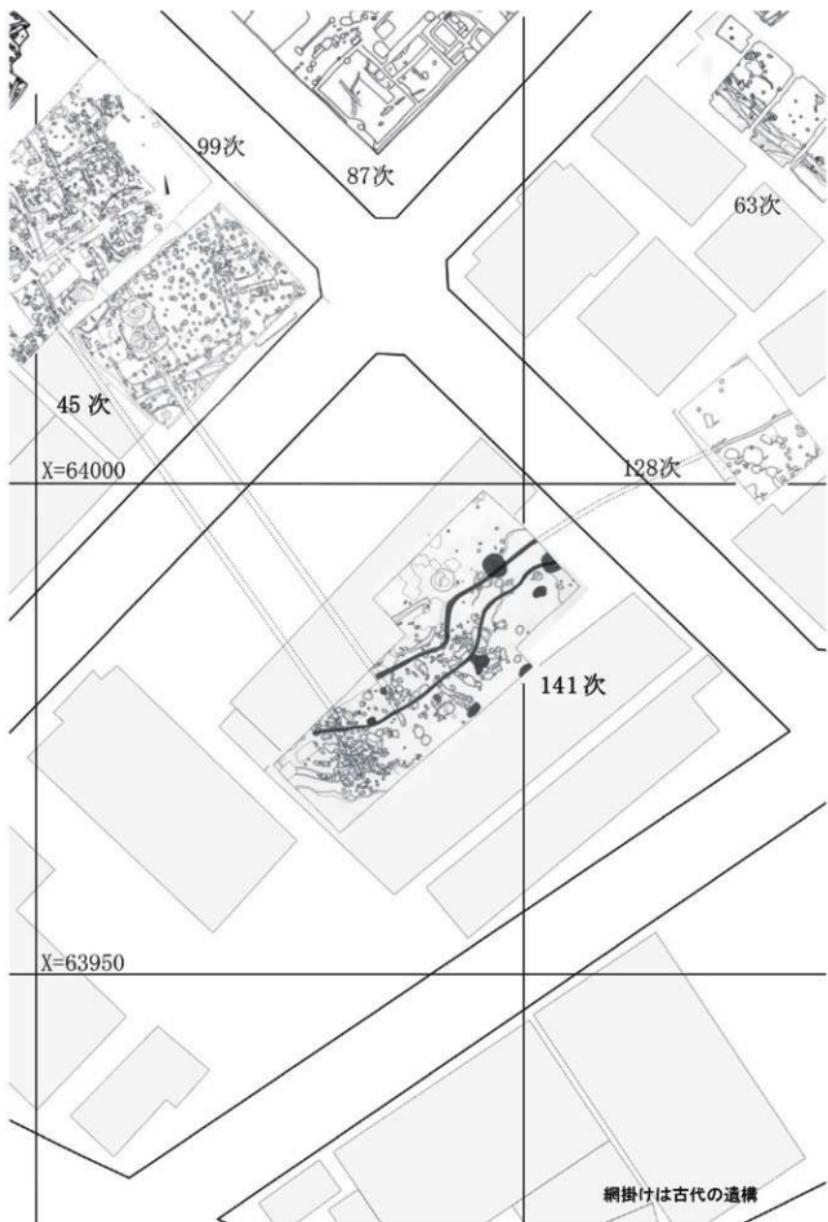


Fig.38 第141次調査区と周辺調査地 (1 / 500)



I 区全景写真（南東から）



II 区全景写真（南東から）



出土遺物

報告書抄録

ふりがな	ひえ 80							
書名	比恵 80							
図書名	—比恵遺跡群第141次調査の報告—							
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第1348集							
編著者名	松崎友理							
編集機関	福岡市教育委員会							
所在地	〒810-8621 福岡県福岡市中央区天神1丁目8番1号 TEL 092-711-4667							
発行年月日	2018年3月26日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東經	調査期間	発掘面積 (m ²)	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
比恵遺跡群	福岡市博多区 博多駅南6丁目 23番5、22番1	40132	0127	33° 34' 32"	130° 25' 54"	20160222 ～ 20160615	495	記録保存 調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
比恵遺跡群 第141次調査	集落	弥生時代終末～古墳時代 古代頭 古墳時代中期 古代	井戸4基 溝5条 溝状遺構	弥生土器 須恵器、土師器、古代瓦、 鏡				
要約	第141次調査区は比恵遺跡群の南端に位置し、那珂遺跡群との境の谷の落ち際にあたる。調査区内は大きく削平を受けており、遺構は標高5.6～5.9mの八女桔士の基盤層で検出された。調査区を東西で二分し、西側をⅠ区、東側をⅡ区とした。主要な遺構としては井戸4基、溝5条、溝状遺構などである。井戸は古墳時代中期が1基、それ以外の井戸はいずれも7世紀代の井戸で、うち2基は最下面に小石を敷いていた。また、Ⅰ区の南端では段落ちが検出され、粗砂層で杭や櫛とみられる木製品が出土した。特筆すべき遺物としては脚部円面鏡の脚部片が挙げられ、脚部の前面下半には押捺施文による紋様が認められる。							

比恵 80

—比恵遺跡群第141次調査の報告—
福岡市埋蔵文化財調査報告書 第1348集

2018年(平成30年)3月26日

発行 福岡市教育委員会
〒810-8621
福岡市中央区天神1丁目8-1

印刷 未松印刷株式会社
〒812-0892
福岡市博多区東那珂2丁目4-36

